

春の夢さめて

谷崎潤一郎と松子が勝山で過ごした十一月



| column |

津山から運ばれた牛肉

終戦前夜のすき焼き

大月ヒロ子

第二次世界大戦の日本での終戦前夜。つまり1945年の8月14日の夜、勝山では二人の文豪が食卓を囲み歓談していました。一人は東京大空襲で焼け出され、岡山市に疎開していた永井荷風。彼の『遷東綺譚』や『断腸亭日乗』には、食にこだわり続けた作家らしく、様々な店の料理が出てきます。そしてもう一人が、同じく美食家であった谷崎潤一郎でした。谷崎は1943年に月刊誌で『細雪』を発表し始めていましたが、戦時中にそぐわない内容と判断され、掲載が中止となっていました。彼は家族を伴って1945年5月に津山へ。そして、7月には疎開先を勝山に変えて暮らしていました。

戦局も極まった時期ではありましたが、岡山県の勝山あたりでは、少しは息がつけようような空気もあったのでしょうか。8月13日から15日に、永井荷風は谷崎宅を訪れます。「津山より牛肉を買ってきたので、来られたし」とのお誘いが来たためです。昔からの肉食文化が息づく津山ですが、物資が乏しい戦時中でも、牛肉を入手できたということには驚かされます。しかし、やはり大変高価なものだったようです。大学卒の月給の2～3倍の金額の牛肉4キロ弱が、文豪二人を囲む宴に用意されたといえます。

勝山には、そんな当時の谷崎潤一郎一家のエピソードを伝え聞いている方々が、今も多くいらっしゃいます。谷崎自らが買い物カゴを提げて、食材を買いに出かける姿を見た人。松子夫人や夫人の妹らが、着物を着て町を歩く華やかな姿に驚いた人…そういった情景を、ついこの間のことのように語り継いでいるのです。

さらには、ちょうどこの頃、仕上げに取り掛かっていた『細雪』の原稿を清書するという大役を担う勝山在住の方が、谷崎自らの面接で決まりました。決め手になったのは、文字のいかんではなく、足袋の白さだったとのこと。細部まで手を抜かず、きちんと美しく暮らす姿勢に、信頼を寄せたのでしょう。作品は1946年から47年にかけて発表されベストセラーとなりました。いまでは書籍だけでなく、映画などにもなっているので、ご覧になった方も多いのではないでしょうか。

勝山では、疎開先の小野旅館さん、呉服屋を営んでいらした水島家などとの交流が深く、水島家には、皆が集まった写真が今も大切に残されています。

＊第20回おかやま県民文化祭 これがOKAYAMA! プログラム「美作国 食は文化の交差点」冊子（発行2022年8月）より転載

おおつきひろこ○IDEA,INC.(岡山県倉敷市玉島)主宰。家庭や企業から日々生み出される廃材を人の創造力で生まれ変わらせる「クリエイティブリユース」を提唱。活動の拠点「IDEA R LAB」を開設。

制作○勝山観光協会 岡山県真庭市勝山 420-2 中国勝山駅構内
tel.0867-44-2120



なつかしき都の

春の夢さめて

空につれなき有明の月

― 二十八 ― 「都わすれの記」より

ながわゆきのり
古書五車堂店主。古本の販売・買取ほか、イベント出店や選書など、本に関わる様々な活動をおこなう。